103例，背面8例，11月正面113例，背113例，12月正背面それぞれ57例を行ない，陰影欠損，脾および脊椎の出現率につき検討した．陰影欠損は確実なもの正面で 3.2%，背面で2.8%，側面で2.7%，不確実なもの正面4.3%，背面1.1%で正面像，背面像，側面像の順に有意であった．脾の出現は確実なもの正面5.7%，背面11.3%，不確実なもの正面6.2，背面15.7%で脾の出現率は背面か正面の倍以上ある．また脊椎の出現率は確実なもの正面6.2%，背面8.4%，側面3.6%，不確実なもの正面2.7%，背面10.7%，側面3.6%と背面が最もよく出現する．以上から背面像は陰影欠損では正面に及ばないが，脾，脊椎の出現率は正面よりはるかによい．しかしこれらと肝の状態の関係については別の機会に述べる．

追加： 斎藤　宏（名古屋大学　放射線科）　1969年度血液学会で発表，近代医学誌上にも発表しましたように，背面から scan しますと脾像がよくでます．肥えた人では前面だけでなく背面から scan することが特に必要です．その際レベルを変えて scan すると，脾の形が良くつかめます．肝臓のバックグラウンドによる影響が除かれてよいと思います．肝硬変症や各種血液疾患で脾腫を伴うものではよく脾像を描出できます．

*

9. 臨床所見と肝シンチグラム

渡辺　令
（名古屋鉄道病院　放射線科）

比較的長期間にわたり経過観察した症例53例について肝シンチグラムと臨床検査所見血清学的検査を主としたものとを比較検討してみた．症例を4群に分けて検討した．即ち，臨床検査成績でも肝シンチグラムでも病的所見がないとしたものⅠ群(17例)，両者に所見のあるものⅡ群(22例)，臨床検査成績では所見なく，肝シンチグラムで所見ありとしたものⅢ群(10例)，臨床検査成績では所見あるも肝シンチグラムでは所見なしとしたものⅣ群（4例）とした．

Ⅰ群には経過中肝生検を2例について行なった何れも肝炎を認めた．Ⅱ群は癌7例，硬変10例，肝炎5例であった．Ⅲ群は癌5例，肝炎3例，バンチ氏症候群2例であり，肝癌とくに硬変との合併，転移性癌，硬変についてはシンチグラムの果す役割は重要であることがわかった．Ⅳ群は4例とも肝炎であり，現在の時点で肝炎については肝シンチグラムの果す役割には限界があると考えられた．各群の代表的症例について肝シンチグラムを中心に供覧した．

追加： 菊地三郎（名古屋大学　第2内科）　今まであげられたアイソトープにする知見が従来の肝疾患診断法にどれだけ新しい情報を与えるかという点については，どうも良く分らないような気がします．形態と機能との解離は当然のことかも知れませんが，アイソトープによる検査はその形態の面でもまだすっきりしない．今後の向上を望みます．

追加： 斎藤　宏（名古屋大学　放射線科）　肝炎の診断は ^{198}Au-colloid による scan で困難を感じることがあります．演者と同意見であります．肝腫大を伴うものではヘモクロマトージスが最も著明でした．

*

10. ^{99m}Tc コロイドによる肝シンチグラフィー

佐々木常雄
（名古屋大学　放射線科）
金子昌生
（愛知県がんセンター放診）

^{99m}Tc コロイドによる肝シンチフォトが，いかに従来の金コロイドによるものに比べて，有利であるかについて検討した．

投与量は ^{99m}Tc コロイド数 mCi であって，肝癌3．肝転移18など合計40例に行なった．正面，第1斜位，第2斜位，両側面，背面など数例を撮影し，20秒以内で撮影した．

撮影されたシンチフォトは肝の辺縁が鮮鋭に，また腫瘤による欠損像も鮮鋭であった．背面からのシンチフォトでは脾影が明瞭に認められた．これはエネルギーの差すなわち低いためと考えられる．

質問： 斎藤　宏（名古屋大学 放射線科）　^{99m}Tc コロイドはガンマ線エネルギーが金コロイドより弱く，シャープに出ますが，肝臓のように厚い臓器ではエネルギーが弱いので吸収がおきて前面からとらえられなかったような背部の tumor はありませんでしたか．

答： 佐々木常雄（名古屋大学　放射線科）　経験しておりません．

*

Presented by Medical*Online